書評

荒野泰典・石井正敏・村井章介 編
『日本の対外関係七　近代化する日本』
（吉川弘文館、二〇一二年）

及川　将基

本書は、荒野泰典・石井正敏・村井章介という各時代で日本の対外関係史研究をリードしてきた三人を編者に、全七巻の刊行を予定しているシリーズの掉尾をかざる。その扱う範囲は異国船打払いから薪水給与令への転換がなされた一八四二（天保一三）年から条約改正が達成された一八九九（明治三二）年である。

本シリーズは、編者を同じくする『アジアのなかの日本史』Ⅰ～Ⅵ（東京大学出版会、一九九二～一九九三年）の続編ともいえる。二〇年近くを経て最新の研究動向を踏まえている事は勿論だが、『アジアのなかの日本史』がテーマごとに重厚な論文で構成されていたのと比べると、通史という形態をとっていることもあり、より平易で一般の読者にも配慮した内容となっている。

各巻は、編者が冒頭に「通史」をかかげ当該巻の歴史の全体の流れと各論文の位置づけを行い、次に「歴史的展開」としてその時代の対外関係を語る基本的な枠組みを時系列にそってとりあげ、「対外関係の諸相」として各論にあたる論文が続く構成を取っている。

各論の執筆者および論題は次のとおりである。

荒野泰典　通史「近代化する日本」

Ⅰ　歴史的展開

荒野泰典「変貌する東アジアと環太平洋―近代化する日本の国際的環境―」

鵜飼政志「「不平等条約体制」と日本

ジョン・ブリーン「近代外交体制の創出と天皇」

麓慎一「確定される「国境」と地域」

井川克彦「居留地貿易と世界市場」

小風秀雅「条約改正と憲法発布」

Ⅱ　対外関係の諸相

上白石実「鎖国と開国」

斎藤純「「泰平の」狂歌の信憑性をめぐって―ペリー来

航と民衆の危機意識―」
田中葉子「黒船・地震・コレラ」
山崎渾子「キリスト教の復活と岩倉使節団」
森田朋子「移民と「からゆきさん」」
北原かな子「留学生とお雇い外国人」
百瀬響「北海道開拓と「旧土人保護法」」
木村直也「東アジアのなかの征韓論」
西里喜行「「琉球処分」論」
安達裕之「和船から洋式船へ」
小野文子「ジャポニスムとシノワズリー」

最初に各論文の内容に簡単に触れたい。

荒野通史は、近世的国際関係が近代的に再編されていく様子を、国内および国際関係の状況を踏まえつつ叙述する。幕末の条約締結が国威の失墜と捉えられ、その回復（条約改正による国家主権の回復）と「処士横議」そして「公議輿論」の実現が国家的な課題となり、最終的に達成されるにいたる背景を、国内のさまざまな分野での再編を有機的に結びつけて説明する。また、「鎖国・開国」や「維新」を言説として捉え直すことも大きなテーマとし、近代のゴールがもたらしたさまざまなバイアスの影響力の大きさにも言及する。

荒野論文は、荒野通史の枠組みによりながら、とくに東アジアおよび環太平洋地域での国際関係の近代的再編の過程をとりあげる。鵜飼論文は、日本型の「不平等条約体制」の実態について、清国と欧米諸国との条約と対比しつつ各国との条約締結にいたった経緯をおいながら、その内容を個別に検証する。ブリーン論文は、明治天皇が外交に果たした役割を儀礼・贈答の側面から検証し、日本の主権が承認されるためにも、その役割は大きかったことをあきらかにする。麓論文は、近代国家として日本が国際情勢の変容に規定されたなかで「国境」を確定させていく様子を樺太・千島、小笠原、朝鮮、琉球について検討する。井川論文は、居留地貿易というあり方が必要とした生糸売込商が、産地商人・外商などと拮抗しつつ流通の「中央」を担う存在になる過程を、世界市場の動向への対応や政府の貿易政策などの側面からみる。小風論文は、憲法制定と条約改正の過程を平行して追うことで、前者が後者の道を開いたことを示す。

上白石論文は、「開国」という用語の幕末から明治期の使用意図を分析する。さらに「開国」を国際法と自由貿易を認め国際社会へ参入することと定義し、とくに出入国制限の実態について検討し、日英通商航海条約は不平等条約を克服しただけでなく自由貿易を実現した点で「開国」を

果たした条約と評価する。斉藤論文は、よくしられた「泰平の～」の狂歌がペリー来航後ほどなく成立していたことを色川三中関連の資料の中から発掘し、「泰平」に当時の人々の社会認識・現実認識が共有されていたことを読み解く。田中論文は、黒船かわら版を分析することで、江戸庶民の対外意識が傍観者のそれであり、その意識に変化が見られるのは横浜開港後に直接異国人との交渉を体験してからであったと指摘する。山崎論文は、明治政府がキリスト教に基づく近代の国際社会において独立をたもつにあたり、最終的にキリスト教黙許政策へ落ち着くにいたる過程を追いかける。森田論文は、国家の体面が損なわれる事を恐れ限定的にしか許可されなかった労働移民が、条約改正を期に転換していった過程を叙述する。北原論文は、明治維新期の御雇い外国人・留学の地方での展開について弘前を実例に検討し、地方と中央が平行関係的位相にあることを見いだす。百瀬論文は、文化的齟齬・社会環境といった観点から明治期の対アイヌ政策をみる。北海道開発の進展・西洋的価値観の導入などによりアイヌの困窮化が進み、その「保護」が日本が文明国化したことを証明するものとして重要視されたと指摘する。木村論文は、幕末以来、征韓論がどのように伝達され、認識され、そして実際の交渉に影響を与えたかを朝鮮や清も含めた東アジア的視野で検討する。西里論文は、日清両属体制にあった琉球がアヘン戦争以降の国際状況の変化にあって琉球処分にいたる過程を追う。安達論文は、西洋からの技術導入のひとつとして合いの子船をとりあげ、様々な要因によって取捨選択がおこなわれた上で技術導入がなされたことをあきらかにする。小野論文は、シノワズリー（一七世紀後半～一八世紀後半）とジャポニズム（一九世紀後半～二〇世紀初）を対比しつつ、その歴史的背景を描写する。

さて、本書がとりあげる内容は非常に多岐に渡たっているが、全体を通していくつかの共通した命題に取り組んでいる。とくに荒野通史によりながら、それを中心に言及したい。

多くの論者によって、「国際関係」が近世のそれから、ヨーロッパ主導の近代的な「国際関係」に再編される際に日本がどう対応したかが論じられている。荒野通史・論文はもちろん、条約（鵜飼論文）、国境（麓論文）、天皇（ブリーン論文）、貿易（井川論文）アイヌ（百瀬論文）、朝鮮（木村論文）、琉球（西里論文）、出入国管理（上白石論文）、移民（森田論文）、キリスト教（山崎論文）などの各分野が対象となっている。日本だけでなく、周辺諸国との比較や反応にも目が向けられている事（荒野論文、鵜飼論文、木村論文、西里論文）が特徴で、前シリーズのタイトル「ア

ジアのなかで日本史」を考えるという視点が受け継がれている。さらに、荒野論文は環太平洋世界から近代化を見る視点が提供されている。あわせて、日本の国際関係の「近代化」を論じる上で、より広い視野から捉える事が可能となるだろう。

また、明治政府にとって万国対峙（＝条約改正、主権の回復）の実現が対外関係上の大きな政治課題であったことが、多くの論文が示唆するところである。そして、その実現のためには西洋的な「文明国化」が必要であり、そのための施策が各分野で行われた。それは単純な西洋化ではなく、西洋の基準に照らして逸脱しない範囲で「日本」が再創造されたに等しいものであった。そのことは、荒野通史・同論文・ブリーン論文・小風論文・安達論文・百瀬論文・北原論文・山崎論文などで、ゆたかに描写されている。現在、日本的や伝統的とされるものの多くがこの時期に作られていたのである。本シリーズの「刊行にあたって」に「日本」のうちが不明瞭であることについて言及されているが、対外関係史は「日本」がいかに規定されていたかをその時々で問う研究領域である事に、あらためて気付かされる。振り返ってみると、現在でもこの不確かな「日本」のイメージに依拠してものを考える事が多くはないだろうか。

関連して、対外関係が、単に外交や貿易という目に見えやすい側面だけでなく、国の内外のさまざまな側面と相互に影響を与え合いながら存在していることが、ほとんどの論文で意識されている。とくに荒野通史は一見すると対外関係の通史ではなく、幕末・維新史の通史といえる内容を持っている。

この書では、いくつか重要な問題提起がなされているが、なかでも従来使われてきた「開国」という言葉に関する荒野通史と上白石論文が興味深い。建国の意であった本来の意味(1)に、欧米諸国との関係を開くという新たな意味(2)が加わった。荒野は、(2)が、本巻を対象とする時期のはじめに生まれ徐々に存在感を強め、この時期のおわり頃には元の意味を忘れさせるまでになり、「鎖国」の負のイメージが定着し「鎖国・開国」言説が成立した、とする。これまで荒野は、近世日本を「鎖国」ではなく、「海禁」と「華夷秩序」の両概念でとらえることを提唱し、かなりの抵抗をうけつつも、それなりの支持を得ている。「鎖国」ではなかったのであるから、「開国」であったかについても問題とするのは、ごく当然なことであろう。荒野が言うように双方の成立は待遇関係にあったのだから。条約改正に至る過程で幕末・維新で達成されたものが(1)の意味での「開国」に等しいという感覚が共有されていたからこそ、その出発点としての(2)の意味での「開国」が受け入れられたと

いう、言説が受容される背景にも踏み込んでいる。

一方で、上白石論文は、「開国」の意味をその時々の文脈で理解するが、実態としての「開国」を国際法と自由貿易を受け入れたかどうかを尺度に検討する。評価の基軸をどこにおいて「開国」を論じるかという議論と、「開国」を言説としてみる立場とには少し距離がある。「開国」を(2)の狭い意味でとらえて、いつ「開国」したかを問い直す事も不毛な作業ではないと思われるが、「開国」という言葉のもつ言説性が問題となっている以上、「開国」という言葉でそれを語っていくのは誤解を招く恐れはないだろうか。自由貿易の達成やあらたな出入国管理体制の創出などという個別に詳細な検討を加えていくのが建設的だと思われる。なお、上白石は、近著(『幕末期対外関係の研究』吉川弘文館、二〇一一年)では、「開国」という論者によって曖昧に捉えられる用語を使用しないで理解することを提唱しているので、すでにこうしたとらえ方はしていないであろうことを附言しておく。ほかにも「開国」が明治二〇年代に意図的に作り出された言葉であることも指摘されており(青山忠正『明治維新』吉川弘文館、二〇一二年)、今後、これまで「開国」を使っていた人々からの反応も含めて(これも「鎖国」同様相当の抵抗があると思われるが)、議論が深められることを期待したい。

本書にはいくつか残念な点もある。編者が提起している「開国」言説や「国際関係」に関する理解に、必ずしも本書の執筆者が賛同しているわけではない。そのこと自体は健全な姿なのではあるが、議論の方向が双方向的ではない点に不満が残る。ほかに、興味をひく問題提起はなされているものの十分な説明がなされていない点がいくつか見られる。たとえば、荒野通史は近代的再編期を前後期にわける指標に琉球処分をあげているが、それをわけた理由を具体的に説明していない。今後、説明がなされる機会を待ちたい。

以上、とりとめのない感想めいた事に終始し、様々な事象を取り上げている本書を的確に論評するのは困難であるため本書の魅力を十分に伝えられたかは心許ない。興味を持たれた方は、是非本書を読んでほしい。さて、荒野通史では、研究者間のたこつぼ的な状況へ危惧を抱いているが、近世史研究者が書いた幕末・明治維新の通史を近代の研究者はどう受け取るだろうか?この書をきっかけに幕末・明治維新の研究が進展する事を願う。

(豊島区郷土資料館)